

平成 2 6 年 6 月 1 2 日現在

機関番号： 1 4 4 0 1

研究種目： 基盤研究(C)

研究期間： 2010 ～ 2013

課題番号： 2 2 5 2 0 3 9 9

研究課題名（和文）ナラティブにおけるアイデンティティー構築についての談話分析的研究

研究課題名（英文）Discourse Analytic Study of Identity Construction in Narrative

研究代表者

佐藤 彰（ SATOH, AKIRA ）

大阪大学・言語文化研究科（研究院）・准教授

研究者番号： 9 0 3 1 2 4 3 8

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000 円、（間接経費） 810,000 円

研究成果の概要（和文）： 自らの経験を語る際、人々は単に情報を伝達するだけでなく、自己と他者の位置づけを行っている。本研究は、異文化間およびオンライン・コミュニケーションでのナラティブにおけるアイデンティティー構築を検証する。

まず、母語話者・非母語話者という、異文化接触場面においてはあたかも壁のように厳然と存在するカテゴリーを、会話の参加者が研究者や同僚という別のカテゴリーを用いて容易に超克しうることが明らかとなった。

さらに、語りのオンライン・コミュニティでのやりとりから、現代社会においては媒体適応能力（または技術適応能力）が必要だということがわかった。

研究成果の概要（英文）： In recounting our experiences, we not only convey information but also position ourselves in relation to others. This study examines identity construction by narrating in intercultural and online communication.

First, it has been found that in intercultural communication, conversationalists may easily move beyond the categorical dichotomy between native speaker and non-native speaker, using other categories such as fellow researcher and colleague.

Then, through the exchange in online community of narrative, it became clear that these days ability to adapt to media (or technology) is necessary.

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 言語学・言語学

キーワード： 談話研究 ナラティブ アイデンティティー

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会言語学および語用論、談話研究におけるナラティブの研究は、Labov & Waletzky (1967) および Labov (1972) におけるナラティブの構造の研究に始まる。これらによれば、ナラティブは実際に起きた（と推定される）過去の出来事を経験を要約する行為／産物であり、十分に展開された（簡略化されていない）ナラティブは概要、方向付け、出来事、評価、結果、終結部の6要素から成る。また、過去の出来事を要約する、時間順に配列された節が2つ連続していれば、それは最低限のナラティブであると構造的に定義される。しかし近年、ナラティブの機能に関する研究が注目を集めつつある。例えば Marra and Holmes (2004) は、ナラティブを定義するには構造的な基準だけでは不十分で、文脈を考慮に入れた機能的な基準が必要であると述べている。

(2) また、分析の対象となるナラティブには、インタビューの中で聞き出され、1人の話し手が質問に答える形で一方的に喧嘩や死の危機などの経験を語るものが伝統的に多い。しかし最近では、日々の生活の中で一時的に話される small stories（短く些細な話）(Bamberg 2004a, 2004b, Georgakopoulou 2006b, 2007, 2008, Bamberg & Georgakopoulou 2008)、複数の話し手による（再度の）語り(Norrick 2000)、将来の予定の話(Georgakopoulou 2004, 2006a, 2007)などをもナラティブ研究の対象に含めようという新しい動きが見られる。Georgakopoulou (2006b) はまたナラティブ研究の潮流を振り返り、1970年代頃のテキストとしてのナラティブの研究を「第一の波」、80~90年代中心の文脈におけるナラティブの研究を「第二の波」、そして現代のナラティブとアイデンティティの研究を「第三の波」としている。

(3) このように、国外ではナラティブ研究が転換期を迎え、今まさに新たな展開を遂げているのに対し、国内ではいまだに伝統的な研究方法・研究対象・問題意識による研究が主流である。

2. 研究の目的

(1)① 応募者は、2009年7月にメルボルンで開催された国際会議で、異文化間コミュニケーションにおける語り、具体的には台湾人と日本人の間の日本語での日常会話における small stories を、ポジショニング理論の枠組みに基づき、会話分析および成員カテゴリー化分析の方法や概念を用いた分析を発表した。この研究では、Bamberg & Georgakopoulou (2008) において提唱されている3つのレベルにおける問い、すなわち、語られる世界において登場人物がどう位置づけられているか、語り（相互行為）の世界において語り手が自己と聞き手をどう位置

づけているか、また優勢である／標準的な言説に対して自己をどう位置づけているか、という問いを立てた。ここでは特に、前者の2つのミクロレベルにおける分析から、i) 母語話者／非母語話者というアイデンティティの違いが、非母語話者自身の言語能力への自信のなさの表出により明らかになること、ii) 非母語話者のことばを下手ではないと評価すること自体が母語話者としてのアイデンティティを示していること、そして iii) 非母語話者のことばはコメントされ、修正されるものであり、また母語話者のように話せるはずがないという言説が存在することがわかった。この結果、母語話者／非母語話者というアイデンティティが constructed dialogue（創作話法）を通して喚起され、受容され、維持されることが浮き彫りになった。

② 応募者はまた、2008年3月に出版された論文集（和文・編著）において、これまでナラティブ研究の対象になることがなかった、コンピューターを介したコミュニケーション(Computer-Mediated Communication、以下CMC)における語り、具体的にはファンサイトと呼ばれるウェブサイトへの投稿に着目した。まず、ファンサイトに寄せられたライブレポという名の投稿は、機能的な定義に従うとそのほとんど全てがナラティブと言えること、そしてそのジャンルの選択は、喜びを表現し伝え、共に語り合い、またライブでの出来事を知らせるのに適しているからだとの考えを示した。次に、そのナラティブにはレベルの違う2つの種類の引用が比較的多く見られ、そのうち「ライブにおける発話の引用」は、ナラティブにおいて多くの異なる機能を持ち、また同一の引用が同時に複数の機能を果たす効果的な修辞装置であること、そして「電子メディアの引用機能を用いた引用」は、何についての言及であるかを明確にし、投稿者同士の意見の交換を容易にすることを示した。さらに、共通体験のナラティブの書き込みとその読みおよびそれらへのコメントがファン同士を結びつけ、その絆を深めることに貢献しているさま、つまりファンサイトというインターネット上の仮想空間での語り、オンラインでのコミュニティの形成および維持、強化に寄与しているさまを描いた。

③ さらに、2008年11月に出版された論文集（英文）においては、同種のデータを用い、このコミュニティに見られるグループ・アイデンティティが、Herring (2004) の挙げるオンライン・コミュニティの基準のうち少なくとも、参与、共有された文化、成員の自己認識の点において明確に示されていることを指摘した。

(2) 上記の研究成果をもとに、本研究においては、文化的背景の異なる者同士の会話のデ

ータを多数収集し、その small stories の中においてアイデンティティーがどのように構築されているのか、またその構築に共通するパターンがあるか、あるとすればそれはどのようなものかを解明する。さらに、オンラインでのコミュニケーションによる語り、またその語りの中での自己と他者の位置づけが、対面コミュニケーションとどのように異なっているのかを、言語的分析にとどまらず、マルチモードの分析を行うことで明らかにする。

(3) 本研究は、これまでの日本におけるナラティブ研究においてほとんど扱われることがなかったデータ・アプローチ・概念を用いる点に特色がある。具体的には、異文化接触場面やコンピューターを介したコミュニケーションで語られるナラティブなどのデータ、マルチモード分析やクリティカル・ディスコース分析などのアプローチ、実践共同体 (Wenger 1998) やポジショニング (Davies and Harré 1990, Bamberg 1997) などの概念を用いる点が独創的である。

(4) 文化的背景が異なる者同士の、またオンラインでのコミュニケーション行動を知ること、日本が現在急速に迎えつつある多文化共生社会および情報化社会においてよりよいコミュニケーションの実践に有益な示唆を与えるに違いない。

3. 研究の方法

(1) 会話のデータ収集については、文化的背景の異なる者の会話を録音・録画し、ナラティブを抽出する。また、その後インタビューを行い、彼らが自己と他者のアイデンティティーについてどのような意識をもっているかを尋ねる。

(2) オンラインのデータ収集については、ネット上でのコミュニケーション (チャット・掲示板・ブロックなど) を収集する。また、それらを紙媒体および電子媒体において保存する。

4. 研究成果

(1)① 異文化接触場面のナラティブによるアイデンティティーの構築に関して、日本語母語話者である日本人とその学友で非母語話者である台湾人、日本語母語話者である日本人とその同僚で非母語話者である中国人が、それぞれ行う自由会話を分析し、特にその中に現れるナラティブによってアイデンティティーが構築されるプロセスを検証した。ポジショニング理論を用いてデータを詳細に検討した結果、会話の参加者が、母語話者・非母語話者というアイデンティティー、超上級日本語非母語話者としてのアイデンティティー、研究者や同僚というアイデンティティーを交渉している様子が明らかにな

った。さらに、母語話者・非母語話者という、異文化接触場面においてはあたかも壁のように厳然と存在するカテゴリーを、会話の参加者が研究者や同僚という別のカテゴリーを用いて超克し、個人対個人としてやりとりしていることも明らかとなった。

② 最後に指摘した、共有する別カテゴリーの利用による人間関係の再構築は、インターカルチュラル・コミュニケーションにおける問題を解決するヒントになりうる。一口に「文化的背景が異なる」と言っても、当事者間で全ての点において異なっていることはなく、また異なる点があったとしても、それらは程度の差であることがほとんどである。多かれ少なかれ同じ点や似た点もあるはずで、本質的な違いがある訳ではない。よって、相違点に着目して対立を煽るか、共通点や類似点に着目して協調を図るかは、当事者の選択によるものと言える。だとすれば、インターカルチュラル・コミュニケーションにおける問題とは、必然的に避けられないものではなく、当事者間の努力により乗り越えることが可能なものと考えることができる。

(2)① 現代における新しいメディアを利用したコミュニケーションがどのようなものか、またそれに求められる能力とはいかなるものかを考察した。具体的には、語りのオンライン・コミュニティを例とし、CMC の特性を対面での言語コミュニケーションと比較して描写した。CMC の分類案に基づいた記述および分析から浮び上がってきたのは、新しいメディアを利用したコミュニケーションでは、これまでとは異なる伝達能力が求められるということである。伝達能力はこれまで、談話能力、文法能力 (または言語能力)、社会言語学的能力 (または社会文化的能力と行動能力)、戦略的能力から構成されると指摘されてきた。本稿における CMC の特性の記述・分析から明らかになったのは、伝達能力にはこれらに加えて媒体の技術的仕様に適応する能力、つまり媒体適応能力 (または技術適応能力) が必要だということである。この能力については、技術の程度が低く、メディアの種類が限定され、対面でのやりとりが主たる伝達手段であった時代にはあまり考慮する必要がなかったものの、技術が発展し、多様化したメディアを介したやりとりが頻繁に行われるようになると、それぞれの媒体の技術的特徴を理解し、それに対応する能力が重要視されるようになった。

② 技術適応能力自体の構成要素として、特に CMC に関しては媒体 (技術的) 要因に応じて柔軟に行動する能力が当てはまる。一方、状況 (社会的) 要因に対応する能力は、その福次的構成要素として活動/ジャンルなどを含む談話能力や、参加者などを含む社会文化的能力と重なる。

CMC の普及は不可逆的な動きであり、今後ますます盛んになると思われる。媒体の技術的特徴を理解しそれを使いこなす技術を身につけることは、正確で適切な意思疎通に有益であり、今後より重要度を増すだろう。また、伝達能力を明らかにすることが言語教育に示唆を与えてきたように、伝達能力の一部である技術適応能力を解き明かすことは、コンピューター・リテラシー、さらにはコンピューターを介した人間関係の構築に資するはずである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 秦 かおり、佐藤 彰、井出 里咲子、岡本 多香子、饒平名 尚子、ナラティブ研究の多様性を超えてーその展開の行き先を考えるー、社会言語科学、査読有、15 巻第 2 号、2013、99-105
- ② 佐藤 彰、コンピューターを利用したコミュニケーション、日本語学 (11 月臨時増刊号ー言語研究の新たな展開)、査読有、第 30 巻 14 号、2011、171-179
- ③ 岡本 能里子、佐藤 彰、設楽 馨、白井 宏美、門倉 正美、メディア・ディスコースにおけるマルチモーダル・コミュニケーション、社会言語科学、査読有、13 巻第 2 号、2011、128-132

〔学会発表〕(計5件)

- ① Akira Satoh, 'If I had returned by land, I would have died': Constructing identity in narratives of earthquake disaster, The 13th International Pragmatics Conference, 2013/9/13, The India Habitat Centre, India
- ② 佐藤 彰、ワークショップ「ナラティブ研究の多様性を超えてーその展開の行き先を考えるー」趣旨説明、社会言語科学会第 30 回研究大会、2012 年 9 月 1 日、東北大学
- ③ Akira Satoh, 'Will you marry me?' and silence: Cultural norms behind ideal marriage proposal for young Japanese women in their small stories, The 12th International Pragmatics Conference, 2011/7/15, University of Manchester, UK
- ④ 佐藤 彰、コンピューターを介したコミュニケーション (CMC) の特性: 語りのオンライン・コミュニティにおける伝達能力、「伝達/運用能力を考える」ラウンド・テーブル、2011 年 2 月 20 日、愛知大学
- ⑤ Akira Satoh and Yuki Arita, Performing native speaker/non-native speaker identity through constructed dialogue

in small stories, 'Personal Identity Through a Language Lens' Conference, 2010/5/20, University of Lodz, Poland

〔図書〕(計3件)

- ① 有田 有希、佐藤 彰 他、くろしお出版、インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践、印刷中
- ② 佐藤 彰 他、ひつじ書房、佐藤 彰・秦 かおり編、ナラティブ研究の最前線ー人は語ることで何をなすのかー、2013、iii-ix
- ③ 佐藤 彰 他、ひつじ書房、片岡 邦好・池田 佳子編、コミュニケーション能力の諸相ー変移・共創・身体化ー、2013、347-369、370-371

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 彰 (SATOH, Akira)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号: 9 0 3 1 2 4 3 8